

九産大の教壇に立つ後藤宏教授、岩崎達也教授、古賀ゆきひと(之士)客員教授。
それぞれの分野の第一線で活躍し、輝かしい業績を残してきた3氏に
学生生活の思い出やこれまでの軌跡、そして九産大の学生たちへのメッセージを伺いました。

「デザインとは考えること」。
楽しく、論理的に考えて、
新しいデザインを作りだそう

「芸術学部 デザイン学科」
後藤 宏 教授

大学時代は、芸術学部デザイン学科で染織を学んでいました。グラフィックデザインには全く興味はなく、まるで職人のように織機に向かう毎日でしたね。当時は振り返って印象に残っているのは、恩師の評価。作品が「あか抜けている」「かどわかで判断されました」「コンセプト」という概念はあっても、その言葉すらなかった時代。仕上がった作品自体が、いかに情緒に訴え美しく、完成されたものであるかの重要性を教えていただきました。今も、この視点は大切にしています。

卒業後は、2年間の会社勤務を経て、染織作家として独立。10年近く、1人でデザインから織りまで行ううちに、「自分が一番好きなのはデザイン」であることに、ようやく気づきました。

その頃、あるソフトウェア会社からグラフィックデザイナーとしての誘いがあり、迷い無く転職しました。当時は、日本でデジタルデザインが始まった時代。アップルのマッキントッシュコンピュータが出始めた頃です。30歳を過ぎて、新しい世界に飛び込んだのですから、1年間はテクニックの習得等に苦労

しました。でも、学生時代に図案を描いた経験から、デザインにはむしろ自信がありましたね。

転職となったのは、日本で初めてのデジタルデザインコンテストであるアドビデザインコンテスト'91でグランプリを受賞したこと。その時の審査員が、今も師と仰ぐ奥村毅正氏です。尊敬する奥村氏に認めていただいたことは、大きな自信になりました。

私は、「モダンデザインをクラフト的思考」で行うことを大切にしています。デザインに不可欠なコンセプトを導き出すのは大変な作業です。しかし、特別な才能が無くても、クラフト的思考によって、その端緒を見いだすことが可能です。それは、自分の中にあるイメージや言葉を全て形にするという面倒な作業から始まります。そのためには、自分の能力をフル回転させ、考えることが必要です。「デザインとは考えること」と言ってもいいでしょう。同じ「考える」でも、楽しく考えて、デザインに結実させる方法を、授業を通して学生の皆さんに伝えたいと思います。

後藤 宏
1954年大分県生まれ。1977年九州産業大学芸術学部デザイン学科テキスタイルコース卒業。アドビデザインコンテスト'91グランプリほか受賞多数。グラフィックデザイン、工業デザインなど多方面で活躍。



JR博多駅築業口・壁面モニュメント「博多駅 出会い献上」



「授業では、論理的に考えるテクニックを伝えたい」と後藤教授



岩崎 達也
1956年群馬県生まれ。1981年青山学院大学文学部史学科卒業。2008年法政大学大学院経営学専攻修士課程修了。2015年法政大学大学院政策創造研究科博士後期課程単位取得退学。1981年(株)博報堂入社。日本テレビ放送網(株)を経て、(株)日テレアックスオン執行役員。



大手メーカーを中心にCM、グラフィック作品を多数手掛けている



「実社会の経験を通して得たものを学生たちに伝えたい」と岩崎教授

人の可能性は無限大。
教養を深めて、許容量を広げ
「振り幅」の大きな人間を
目指してください

「商学部第一部 商学科」
岩崎 達也 教授

大学の4年間は自由で、誰にも邪魔されない時間。物事に対する視点を自由に広げること学べる時間です。私は学生時代、漠然と小説家になりたいと思いつつ、自分の好きな本を読んだり、映画や演劇を見たりしては、その感想や「自分ならこうする」というシミュレーション等を書いていました。それが、コピーライターとしての素養になっていたのかもしれない。

卒業後は、広告代理店のコピーライターの仕事をを経て、テレビ局に転職。編成、営業、番組企画等を手掛けました。大手企業の広告や番組制作など、やりがいのある仕事をさせてもらい、恵まれていたと思います。その一方で、中にはつまらないと思う仕事もありました。それでも常に意識していたのは、自分の一番良いものを出していく努力。今、振り返れば、ムダな仕事は一つもない、というのが実感です。

また、広告や番組は、企業のお金で自由に、表現させてもらっていると考えられるようになってから、変わったことがありません。若い頃は「広告は自分の作品」と考えていたのですが、今は「自分の作品」として

わってました。しかし、ある時期からは、広告によって世の中をどう動かすか、それによってプロモーションが成功するかどうかを重視するようになりましたね。

私の授業で、最初に伝えるのは新たな発想の重要性。メディアに限らず、新しい切り口を見つけるのは、どの職業でも重要です。「切り口」が平凡なら、何をやっても月並みです。普通とは違う、しかも社会的に許容される範囲を見極めた発想の仕方。そこを一緒に学んでいきましょう。

大学は、人生に二度とない貴重な時間です。ベースとなる勉強は大切ですが、広い意味での教養を深めてほしいと思います。人間は、考え方の「振り幅」の広さが問われます。そのためには、学びや体験を通して、自分の経験値を高め、知識を深めていくしかありません。いろいろ挑戦することで、物事を感じ取る許容量の大きな、懐の深い人間を目指してください。

人間の可能性は無限大です。自分で「ここまで」と思うと成長はそこで止まってしまう。学生の皆さんには、自分の可能性を信じて、進んでほしいと思います。

PROFESSIONAL

教員紹介

上手にメディアと付き合って
自分自身の人生に生かす
能力を身に付けよう

「国際文化学部 日本文化学科」
古賀 ゆきひと(之士) 客員教授

大学時代のゼミでは、人口論を学びました。そのゼミでの課題が「毎週1冊の専門書を読んで、800字以内のレポートを提出すること」。これは、大変でした。しかし、これで本を読むという習慣が身に付いたと感謝しています。このゼミの先生からは、「遅刻しない」など基本的なマナーもたたき込まれました。社会人になつてから役立ちましたね。

将来はテレビ制作に携わりたいたいと思っていましたが、ある人から「アナウンサーが向いているのでは？」と言われて「それもいいかな」と(笑)。そこで、日本テレビに電話して、大学の先輩であるものの、何のコンネもない看板アナウンサーの福岡功男さんに、OB訪問を申し込みました。すると、気さくに受けてくださったんですよ。これが、きっかけとなり、テレビ局を受験することに。それまで、アナウンサーの勉強などしたことはありませんでしたが、受験を決めてから、新聞の朗読を録音したものを友人に聞いてもらったり、テレビの野球中継の音声を通して、自分で実況の練習をしたりと自己流ながら、修練しました。そん

な私の可能性を感じてくれたのでしようか、FBS福岡放送に合格。以来、アナウンサーとしての道を歩んできました。授業で伝えたいことの一つに、これまでの経験を踏まえた、メディアとの付き合い方があります。事実の一つですが、その解釈は一つではありません。さまざまなアングルから物事を捉えるヒントをメディアは与えてくれます。それを

自分の生き方に生かすことができれば、今後の皆さんの人生は、より豊かになるでしょう。授業では、企画・取材・演出等、テレビの制作サイドの思いも伝えます。テレビ局のスタジオ見学で、イメージと現実のギャップを実感することもあるでしょう。実際の番組を教材に、作り手の意図を読み取る授業もあるかもしれません。そうしたさまざまな経験を通して、世の中にあふれているメディアの情報を取捨選択する能力を身に付けると共に、自分自身の意見を構築する力を養ってください。

これまでの授業を通して、学生の皆さんのやる気を肌で感じています。これから一緒に意欲的に、学んでいきましょう。



ニュース番組のメインキャスターでもある古賀客員教授



学外授業では学生を連れてFBSの見学に



古賀 ゆきひと(之士)

1959年福岡県生まれ。1984年明治大学政治経済学部経済学科卒業後、FBS福岡放送入社。人気番組「ズームイン!!朝!」「めんたいワイド」の司会、ドキュメントの制作等を経て、現在は「NEWSめんたいPlus」を担当するエグゼクティブ・アナウンサー。